

55 明治7年10月27日 菊池長閑宛

第六号 十月廿七日認む (長閑注記)

第六号十月十二日付之尊翰拝披仕候愈御機嫌能御消光之由大慶
此事ニ候御祖母様も当時御湯治之趣至極御宜き御事と存居候さ
て陸軍并文部省之生徒共父母之病故と雖_レ帰県不相成と布達ニ
ても有之候様御申遣に候得共恐クハ陸軍生徒の間違ニ可有之仰

の如く文学生徒にハ御構被成候道理無之故ハ当校并他学校ハ日
本国文運の中心にて後來開化文明必是等ノ処ヨリ起ラねハ不成
少く事件の起度毎ニ学校ニ構候てハ国の文運地ニ墮テ進歩ハ勿
論其俣ニ保事も不出来到底国の損亡ニ候得ハ迎も政府にて如斯
頑愚固陋不見無識の令ハ出ス申間敷仮令出候共文部省にて決
テ承知致さるハ私共全く信所ニ候兼てハ校長監事等と談話致候
事ニは仮令外国教師ハ暇を遣候て学校ハ閉とも田舎に入テ共々
に学業を勉勵シ飽マテモ志ハ遠大を期セシ_レ専要なり若事甚急
なる時ハ銘々心の儘に致或ハ軍ニ従ひ或ハ猶引続キ勉学するも
勝手たるへく仏普戦争の時ニも普大学校の生徒兵伍ニ加り候も
全く自分ヲ好て為たる事勿論学校を閉等の事無之仏国すら普軍
の_名パリス_ノ府を囲マテハ府内の学校にてハ平生の如く業を
勉めて不正善例皆人の感スル所且不如斯ハ道理ニ於て不相成今
強て書生の身を銃丸の下ニ斃_レハ折角是迄朝廷にて御尽力被成
候分も一朝の烟と消水の泡に帰候事三才小兒も所知なれハ決テ
如斯の命令無之を保候私一人の身に取ての所置ハ前号已に申上
之通ニ候間御案心被成下度奉願上候_一支那一件ニ付華士族ハ来
年の家禄当に不成と噂も有之由成程一國困窮の時ハ華士族而已
晏然俸米を食する事ハ不出来仮令出来候とも不思議ニ御座候併
朝廷にてハ多少御給与相成ハ猶を不容如何となれハ若此危急の
時ニ当テ華士族の不平を与候ハ政の得たる者に有之間敷忽_テ居
候内乱を連く而已ニ御座候故なり_一本宿も当時清国_{アモ}廈門_ノ港ニ滯
在致居至極無異にて奉職数々書翰も遣取致居候彼地とても様子
の別段分り候訳にも無之昨夜窃に九月十四日大久保_(全權)弁_(抹遣)

理大臣柳原公使ト共に恭親王文詳以下之支那官吏ト応接書取ヲ見候処問目二条アリ第一条ハ夫レ国之版図内ニ在ル地ハ必ス夫なりの政官を置兵備を成ス可シ貴国実地上何程の政教を布クヤ支那官答ルニ国土広大各其他宜ニ因テ法を設台湾の如きハ漸を以テ化ス可ク故ニ今僅餉ヲ納得者ニハ納シメ秀良ナル者ヲハ社

学ニ入シム事ナリ而已第二条万国交親ノ時ニ当テ管民ノ外国人

ヲ慕殺スルヲ見テ之ヲ度外ニ置ハ如何支那官答不顧ニ非レモ事

ニ因テ遅速なき不能貴国若前より照会アラハ今少し早くも処置致シタロウト云意実ニ皆因循姑息の答面談中ニハ全く大久保ニ

問詰ラレ候故通弁官の間違も有へく寧書面ニテ尋呉ヨトテ右ノ義ニ及ヒシナリ已同月十六日ニ答タルナリ其後ノ事ハ未タ不相

聞何レ日支官吏ノ間而已ニテハ何分議決早俄取難く向ニテハ属地此方ニテハ無主ノ野地と云水掛論ニ近ヲ以テナリ併先格別心

配ノ事も無之様右の問答ニテ見得候今度の電報ハ議決ヲ告可ト折角待居候」写真業先月已ニ出航致タル旨木ノ下申聞候由其後

催促も不致居候併猶又聞配可致候」一昨日一心亭主人なる者の写タル明治橋中ノ橋八幡祭の練物方御城県庁の画を見候北神川

の水路ハ丸テ変候と覚得候御都合次第御家族の御写真を御惠投被下候ハ、幸甚々々追々寒氣相催候間折角時下御献被成度私事

ハ繰言ながら御案被成下間敷候草々頓首

御尊父様
閣下

武夫拜

四五ノ二号御落手被成下候や藤田ハ最早仙台ニ参候やと考居候彼も今又師範学校ニ入学ノ心得之趣申参候此年ハ私初より勤候

得共承知不致故初手から六ヶ敷語学校之方ニ周旋仕候事ニ候然に今日如斯にてハ殆ト力落候併何処なりとも落付候得ハ私ニ於ても大ニ安心仕居候不一

(長閑注記)

〔十一月二日達し返事同八日此方第八号ヲ以郵便へ出し〕